川田順・尾山篤二郎の水無瀬宮参詣

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安田, 純生 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4677

川田順・尾山篤二郎の水無瀬宮参詣

安田純生

1

川田順の第三歌集『山海経』は、大正十一年一月一日を発行日として東雲堂書店から刊行されている。収録する歌は、巻末に掲載された著者の文章によれば「大正六年晩秋の某日から最近までの、言ひ換へれば私の三十六歳の十月から四十歳の十月まで」に詠作した作品より「三百二十五首を自選し」たものであるという。そして、同じ文章に、

この集を出版するに就いて詞友尾山篤二郎君及び東雲堂西村陽吉君の御骨折にあづかつた事は一通りではない。又歌の字句の推敲に当つて恩師佐々木信綱博士、先輩窪田空穂氏、詞友植松壽樹君達から有益な助言を頂いた事も尠くは無かつた。これ等の方々に厚く御礼申し上げる。

と書かれている。川田は短歌結社、竹柏会に所属していたので、佐佐木信綱は「恩師」であった。一方、川田は、結社は違うものの窪田空穂からも大きな影響を受けていた。この文章によれば、折々に作品の批評をしてもらっていたらしい。川田は、大正八年九月に、数日間、空穂と松村英一を大阪市南区天王寺常盤通（現在の地名でいえば、大阪市阿倍野区の阿倍野筋・松崎町の一部にあたる）の自宅に泊めたことがあり、そのときが川田と空穂との初めての出会いであったらしい。それ以前において面識がなかったにもかかわらず川田が空穂たちを招き、空穂たちが川田家に滞在したのは、当時、空穂の門弟で、大阪の会社に勤務していた植松壽樹の仲介があったからである。

川田が空穂の歌に注目するようになった経緯に関しても、植松の存在が大きかった。昭和十七年五月に朝日新聞社から出版した『定本川田順歌集』の「定本歌集後記」のなかで、川田は、

時代おくれの一歌集を送り出した後、予は急転回を行なつた。その頃大阪に在住してゐた植松壽樹氏と懇意になつたが、氏は逢ふ毎に窪田空穂氏の噂をした。恰も予が竹柏園大人の歌を諳

記してゐた如くに、植松氏は窪田氏の歌を諳記してゐた。さうして、逢ふ毎にそれを誦しては予に聴かせた。いつの間にか予も空穂贔屓にされてしまつた。予の歌風は当然変化して来た。丁度同じ頃、尾山篤二郎氏とも相識るやうになつた。大正八年九月、窪田氏は松村英一氏を連れて来阪し、共に拙宅に数日滞留した。朝夕互に歌の話を交換し、河内や大和へ吟行も共にした。予の写実主義への転向は完成した。「山海経」の歌はその前後の所産であつた。

と述べている。文中に「時代おくれの一歌集」とあるのは、大正七年三月に竹柏会より刊行した『伎藝天』をいい、「竹柏園大人」とあるのは、いうまでもなく佐佐木信綱である。「大阪に在住してゐた植松壽樹氏」とあるが、植松が大阪に住んでいたのは大正六年から同十年までの五年ほどであった。ともに東京出身であったふたりは、大阪において親しく交わり、植松は、空穂の歌のすばらしさを川田に宣伝し、川田もまた、そのすばらしさを認めて、影響を受けたわけである。前に引いた『山海経』掲載の文章の一節に書かれていることの背景には、右のような事情があった。

大阪における川田と植松との交友や、空穂・英一の川田家滞在については、すでに述べたことがある。また、一時期、阪神間に居住していた木下利玄や中村憲吉と川田との交友、さらに、川田と植松が中心になって、大阪市近辺在住の歌人たちを集め、五日会という一種の文学サロンを、大正八年十一月以後、川田家で月々催していたことについても、書いたことがある。そこで本稿では、川田と尾山篤二郎との交友に関し、それも、ふたりが行動を共にした大正十一年の古曾部・水無瀬・山崎の吟行についてのみ、少し述べてみたいと思う。

川田は明治十五年一月十五日に生まれ、尾山は明治二十二年十二月十五日に金沢で生まれているので、川田誕生ののち、ほぼ八年たって尾山が誕生したことになる。ふたり以外では、空穂が明治十年の生まれ、英一が明治二十二年の生まれ、壽樹が明治二十三年の生まれなので、尾山は、英一や壽樹と同世代である。

川田順と尾山篤二郎との交友について述べる前に、大阪在住時代の川田が、大阪のどこに住んでいたかについて、『定本川田順歌集』に掲載された「川田順年譜」（川田の作成した年譜である）にもとづき、簡単に記しておきたい。

川田順が東京帝国大学法科大学を卒業して住友本店に入社し、大阪に来たのは明治四十年であった。当初は、大江橋北詰の「駒の家」のほか、市内のあちこちに下宿していたようであるが、四十三年三月には河原林杞子と結婚して、大阪市南区天王寺松ヶ鼻町（現、天王寺区松ヶ鼻町）に新居を構え、翌四十四年七月には京都市に転居している。大正二年一月から十二月までは天王寺旭通（現、阿倍野区の阿倍野筋・旭町の一部）に住んでいた。その後、転勤で東京に戻ったりして、同五年六月に、前記した天王寺常盤通の地に居を定めた。そこには、同八年十一月まで住み、東区谷町二丁目（現、中央区谷町）の住友の舎宅に転居している。そして、四年余り後の大正十二年八月に兵庫県武庫郡御影町（現、神戸市東灘区内）に家を

新築して移るまで、そこに居住していた。

結婚後に住んだ四箇所の家のうち、天王寺松ヶ鼻町の家や谷町の家には、竹柏会の仲間であった木下利玄が宿泊したことがある。利玄は、大正七年八月四日に天王寺常盤通の家を訪れたこともある。前記したように、同八年九月に窪田空穂と松村英一が滞在したのは、常盤通の家であった。そのときには、常盤通の近くに下宿していた植松壽樹が、川田家に宿泊した夜もあったらしい。また、月例の五日会が催されていたのは谷町二丁目の家である。

2

さて、前掲の「川田順年譜」には、大正七年の条に、

八月、尾山篤二郎と初瀬・纏向・畝傍等を巡礼す。

と書かれ、大正十一年の条には、

十一月、尾山篤二郎と古曾部・高槻・山崎に吟行す。

と書かれている。ただ、この記事では明瞭でないけれど、実は尾山は、七年八月には天王寺常盤通の川田家に、十一年十一月には谷町の川田家に、たぶん、長く（といっても具体的な日数は不明）滞在していたのである。つまりふたりは、川田の家から大和に出かけたり、淀川右岸の古曾部・高槻に出かけたりしたのである。そして、大正七年八月に、「初瀬・纏向・畝傍等」の大和をまわったときの尾山の歌は、大正十年七月に東雲堂書店から刊行された『まんじゆさげ』に「大和道」と題して収録されており、歌数は百十七首に及ぶ。また、同集には「此小著を川田順に捧ぐ」との献辞がある。また、十一年十一月に淀川右岸を大阪府三島郡から京都府の山崎まで北上したときの尾山の歌は、大正十四年四月に紅玉堂書店から刊行した『草籠』に「古曾部行」と題して四十九首が収録されている。

先ほど述べたように、本稿では、十一年十一月の吟行を取り上げ、そのときのことを題材にした歌のなかから、水無瀬宮参詣の歌を見ておきたい。西行や『新古今集』の研究者でもあった川田・尾山にとって、水無瀬宮参詣は大きな意味を持っていたと推察されるからである。水無瀬宮は、現在は水無瀬神宮と称している。しかし大正時代には水無瀬宮と呼ばれており、大阪府三島郡島本村大字広瀬にあった。現在の地名でいえば大阪府三島郡島本町広瀬にあたる。川田・尾山が水無瀬宮に参詣したのと同じ大正十一年十一月に『大阪府志』巻之三が出版されているが、その「水無瀬宮」の項には、その冒頭に、

水無瀬宮は中央字門の口にありて、後鳥羽天皇・土御門天皇・順徳天皇を祀れり。此の地は後鳥羽院の御し給ひし水無瀬殿のありし所にして、其の御殿は建保五年正月七日徙御し給ひし新築前の旧御所ならん。

と書かれている。『新古今集』編纂を命じた後鳥羽院が愛した水無瀬殿の存在していた場所であり、後鳥羽院の霊を祀る宮でもあった。だから、川田も尾山も、平安時代の歌人、伊勢ゆかりの伊勢寺や、同じく平安時代の歌人、能因ゆかりの能因塚に対する思い以上に深い関心を持ち、水無瀬宮に参詣したはずである。

このときのふたりの、徒歩による吟行は、現在の地名でいえば、高槻市内から三島郡島本町を通って京都府乙訓郡大山崎町に至るものであった。そして、淀川右岸の山崎からは橋本の渡しを利用して左岸の橋本へ渡っている。尾山の歌集『草籠』の「古曾部行」には、長短は異なるが十一箇所に詞書がある。まず初めに記されているのが、次のような詞書である。

十一月五日、川田順、矢島歓一両君と摂津三島郡磐手村古曾部に遊ぶ。三島郡は古の三島江、磐手は歌枕の磐手の杜の跡也。古曾部は古曾部入道といひし能因法師の棲みし処にて、今法師の塚あり。またその村の山手に寛平法皇の御息所伊勢御の住み給ひし伊勢寺及び伊勢の御の墓あり。この行高槻駅に下車し山崎の天目山なる宝寺までなり。夜、橋本の渡しを渡り月を踏んで帰る。

「摂津」云々とあるが、いうまでもなく、大阪府三島郡は旧国名でいえば摂津になり、淀川を挟んで河内に対している。大正十一年十一月五日に、川田順・尾山篤二郎・矢島歓一の三名は、大阪から列車に乗って高槻駅で下車、そこから能因塚・伊勢寺を訪ねたようである。疑えば疑えないこともないとはいえ、こういった記事は、事実として、そのまま信じていいのであろう。ただ、尾山は書いていないけれど、あとで引く川田の歌集によれば、三人が初めに参詣したのは上宮天満宮であった。上宮天満宮は、当時の三島郡高槻町上田辺（上田部）、現在の高槻市天神町に鎮座し、上宮天神とも野身神社とも呼ばれていた。尾山が、上宮天満宮について書いていないのは、そこを詠んだ歌がないので記載不要と判断したためであろうか。

このとき、川田は数え年で四十一歳、尾山は三十四歳、同行者の矢島歓一は、明治三十一年十月八日生まれなので二十五歳であった。尾山の「古曾部行」の詞書を主な資料として、川田順の歌集も参考にしながら、当日の吟行のコースを記しておけば、次のとおりである。

高槻駅→上宮天満宮→伊勢寺→能因塚→檜尾川→桜井の里の楠公父子訣別の跡→水無瀬宮→水無瀬川→山崎の宝寺→橋本の渡し

尾山の歌集に見える四十九首が、吟行中に詠まれたものか、帰ってから詠まれたものか、吟行中に詠まれて、のちに改作されたものか、そういうことは一切わからない。この種の歌を取り上げて、「吟行」だからというのであろうか、吟行中の詠作であるのを自明の事実として書かれている文章によく接する。しかし、本当のところは不明である場合が多い。わかるのは、吟行中で見聞きした事柄や感慨が題材になっている歌ということだけであり、それでも、どこまで信じていいのかという問題は残る。虚構がなかったとしても、語られていない事柄、隠されている事柄がないとはいえない。

さて、尾山の四十九首のうち、水無瀬宮参詣を題材にした歌は八首で、その八首の前に次の詞書が置かれている。

水無瀬の宮に詣づ。隠岐院の御手形の御宸翰、あるは菊造の御太刀などを拝し、そゞろに承久の昔を憶へり

いうまでもなく、「御手形の御宸翰」は、後鳥羽天皇が自筆の書翰に朱の手印を押した「後鳥羽天皇宸翰御朱印置文」をいい、「菊造の御太刀」は「伝後鳥羽天皇宸作宝剣」を指す。それを見て承久の変のあった昔を思いやった、というのである。八首を引く。

竹藪の道の行手は柿の実のうれづくいろのあかあかと見ゆ
とつみやと水無瀬の宮のありしときこの道ゆきし牛車あはれ
河狩に野狩りにいでて大君しあどもひましし御軍あはれ
御手形の朱のいろあかくあきらかに書かせたまひし御筆あとあはれ
大君しみづから立たし槌とりて鍛へたまひし大御太刀あはれ
ふくよかに肥えておはせり鎌倉を撃てと宣らしし大御目やこれ
白栲の朽木のとばり裾ゆれて水無瀬の宮の秋の夕風
芝ふみてはづかに照れる薄紅葉仰ぎまかづる夕べなりけり

四首目が「御手形の御宸翰」を、五首目が「菊造の御太刀」を詠んだ歌である。二首目から五首目までの四首は、いずれも末尾に「あはれ」が置かれている。これは、早く『万葉集』巻三に聖徳太子の作として見える、

家ならば妹が手まかむ草枕旅にこやせるこの旅人あはれ

という伝承歌以来の型である。こういう古代和歌の型や「とつみや」「あどもひ」「宣らしし」などの古語、「大御太刀」などの最大限の敬語を用いて荘重に表現してはいるけれど、私などの耳には、そらぞらしく響く。ただし、古き世の物、それも後鳥羽院の手の触れた物に接し得た感激は伝わってくる。七首目の「朽木のとばり」とは「朽木模様のある帳」の意か。それでは「白栲の」と合わない気がするが、よくわからない。ちょっとおもしろいのは八首目であって、「まかづる」という語を用いているので、後鳥羽院のもとに伺候した臣下のつもりで詠んだ歌のようにも読める。もしかしたら、藤原定家のイメージが背後に置かれているのかもしれない。

3

水無瀬宮参詣を題材にした尾山篤二郎の歌が右のようなものであったとして、川田順は、どのような歌を詠んだのであろうか。

川田は、歌集『青淵』を昭和五年五月に竹柏会より刊行している。そこに「竹群」と題する章があって十九首が収録されており、それらは、七箇所に挿入された詞書によって、大正十一年十一月五日に尾山とともに吟行をした折の作と推測できる。すなわち詞書に「高槻、上の宮の天満宮」「伊勢山」「林羅山撰文伊勢碑」「伊勢寺」「古曾部より安満に出づ」「山崎街道」「山崎宝寺」と見えるのである。ただ、『青淵』には、何月何日に出かけたという注記はないし、尾山たちと一緒であったことも出てこない。いいかえれば、歌集を読んだだけでは、秋の某日に、高槻から山崎まで、ひとりで歩いたようにも受け取れる形になっているのである。また、歌集中には、能因塚を詠んだ歌が一首も見られず、水無瀬宮を題材にした歌は、歌集に収録されてはいるけれど、「竹群」の章に含められずに別立てになっている。

『青淵』には「水無瀬詣」と題する章があり、その章に、水無瀬宮を詠んだ歌二十二首が収録されているのである。そこには六箇所に詞書が挿入されており、その詞書と、それぞれの詞書に関係する作品数を記しておくと次のようになる。

晩秋某日水無瀬宮に詣づ　三首
後鳥羽院の御手形の宸翰を拝して　三首
十二月七日祭礼の日に再び詣でて　四首
宝物拝観　八首
宮司は後鳥羽院の侍臣藤原親成の裔なりといへば　一首
帰途　三首

ここでも「晩秋某日」とあって、参詣の日が意図的に曖昧にされている（と、私には思える）。川田が参詣の日も誰と参詣したかも忘れてしまった、とは思えない。しかも、この詞書に従って読んでいくと、その「晩秋某日」に参詣した折のことを詠んだのは初めの六首のみで、「十二月七日祭礼の日に再び詣でて」以下の十六首は、同じ年の十二月七日に、再び参詣した折のことを詠んだ歌と解するのが自然であろう。しかし、実際には、そう単純には決めてしまえないようである。『青淵』出版以前において、川田が水無瀬宮に二度、参詣したことは、川田筆の「『青淵』序」に、

歌仙後鳥羽院の水無瀬宮には再度参詣した。

と書かれてもいる。そうすると、川田は、大正十一年の一一月五日と十二月七日の二度、水無瀬宮に参詣したのであろうか。

ところが現実には、同じ年の十一月五日と十二月七日に、水無瀬宮に参詣したのではなかった。「晩秋某日」が大正十一年十一月五日とは別個の日を指す可能性は、まず、あるまい。なぜならば、そうだとすると三回参詣したことになって、「再び詣でて」「再度参詣した」との記述と矛盾するからである。問題なのは十二月七日の参詣であって、二度目の水無瀬宮参詣は、大正十一年ではなく、二年後の大正十三年十二月七日におこなわれたものである。どうして、そのことがわかるのかといえば、まず、昭和十年一月刊の『青淵』第三版では、「水無瀬詣」の一連が大正十三年の作とされているからである（こう一括すると大正十一年の作は含まれないことになって新たな問題が生じるが、今は触れない）。また、川田と親交のあった今中楓溪が大正十四年十月に紅玉堂書店から出版した歌集『あかね』を見ると、大正十三年の作品中に「清興篇」と題する章があって四十二首が収められ、その冒頭に、

十二月七日川田順氏をむかへて、八幡、山崎、水無瀬に遊びし折よめる

という詞書が添えられている。つまり、大正十三年十二月七日に川田は、大阪府北河内郡樟葉村（現、枚方市内）に住んでいた今中楓溪を訪ね、今中とともに周辺を吟行し、さらに淀川を渡って水無瀬宮に参詣したのである。今中の記述は、そのまま信じていいであろう。

実は、樟葉の今中楓溪宅訪問のことを詠んだ歌は、川田の『青淵』にも、「水無瀬詣」の章の次に出てくる「冬日訪友」の章に、

北河内樟葉の今中楓溪氏を訪ひて、三首

という詞書のもとに見える。しかし、今中宅訪問が何月何日であったかも、二度目の水無瀬宮参詣が、その日であったことも、『青淵』を読んだだけではわからない。わからないようになっているのである。

もちろん、短歌は、体験や現実の忠実な記録であることが肝要、などと私は思わない。むしろ、体験や現実がそのまま反映しているかどうかなどは、私のような読者の立場からいえば、どうでもいいことである。しかしながら、川田自身は、『山海居閑語』（人文書院、昭和十三年四月）所収の文章「旅行歌の作り方」の中で、

作られた歌にいやしくも虚偽が有つてはならない。これは旅行歌に限る事ではないけれども、旅行歌には特に用心しないと、虚偽を平気で詠み込むおそれが多い。他人の知らぬ事だから構はぬなどと、図太い考を起し易いから、注意を促す次第だ。又用心深くないとつい悪意なしに虚偽を歌ふ事にもなる。

と主張している。川田は「虚偽」と称しているが、要するに虚構の歌はよくないということであろう。これは、歌の内容に関した発言であって、歌集の構成などについていっているのではない。また、川田が、『青淵』において、「虚偽」を詠んだり「虚偽」の詞書を付けたりしているわけではない。とはいえ、吟行の歌も旅行歌といえるはずで、『青淵』の歌は、見方によっては「悪意なしに虚偽を歌ふ事に」なっているといえなくもあるまい。異なった年なのに同じ年と思い込んだり、作者がひとりで出かけたなどと思い込んだりするのは、読者が勝手な読み方をしているだけだ、とはいえないのではないか。そう思いつつ、私には、『青淵』の作品の配列や詞書が興味深い。

これこそ私の勝手な見方ともいえるが、ある年の晩秋に友人とともに水無瀬宮に参詣し、その二年後に、別の友人とともに水無瀬宮に参詣したとするよりも、晩秋にひとりで水無瀬宮に参詣し、ひと月後に、再びひとりで水無瀬宮に参詣したとする方が、水無瀬宮に対する思い、つまりは後鳥羽院への思いが強く感ぜられないであろうか。少なくとも、私には、そう感ぜられる。とすれば、仮に意図的ではなかったとしても、同じような思いが川田の心の中で密かに働いた可能性もあろうか。

ともあれ、「晩秋某日水無瀬宮に詣づ」との詞書がある三首をあげよう。

うちわたす淀野の穂田の夕明りここにわがたどる水無瀬の道を
媼（おうな）ゐて道のまなかに箕をふるふ頭（かうべ）の上にさしあげて篩ふ
しみじみと媼の篩ふさしあげ箕殻（から）は吹き飛ぶこれの宮路に

一首目の初句の「うちわたす」は「見渡す」の意。この語も第二句の「穂田」も万葉語である。「淀野」は、ここでは「淀川のほとりの野」くらいの意味合いで用いられているのであろうか。三首目の「さしあげ箕」は、上に差し上げた箕を意味する語で、大正時代には、何でもない光景であろうけれど、さびしげな雰囲気が漂う。「ふるふ」の語の繰り返しや、「媼」と「宮路」との対比も生きている。三首ともに、水無瀬宮とは直接的には関係のない歌であって、水無瀬宮への道で、たまたま見かけたというに過ぎない。しかし、

とくに二首目・三首目の歌には、そのさびしげな雰囲気ゆえに心惹かれるものがある。

「後鳥羽院の御手形の宸翰を拝して」という詞書のある三首もあげておく。

展ぐるや御文の上に朱らかに御手のしるしのあらはれてたふと

島風の冰る夜を御筆とらしけむこまごまとこれのひとひらの紙に

生れながら大き歌人におはしましきそこゆゑ悲しこの大君ろ

「朱らか」は「あからか」と読むのであろう。ここでも、尾山の作と同じく、「そこゆゑ」「大君ろ」といった古語が用いられ、荘重さを出そうとしている。それはわかるし、やはり、古き世の物、とりわけ後鳥羽院の手に触れた物に接し得た感激は伝わってくるのであるが、何となくことばが空しく響く。なお、尾山が、「大君しみづから立たし」云々と詠んだ「伝後鳥羽天皇宸作宝剣」を川田は、

八十国の大きすめらぎ鍛冶さび打たしし鋭刃はあやに冴えたり

と詠んでおり、これは「宝物拝観」八首の中に見える。前に記したように「宝物拝観」八首は「十二月七日祭礼の日に再び詣でて」という詞書のある四首のあとに収められているが、だからといって、大正十三年十二月七日の二度目の参詣のことを詠んだとはいえないわけである。少なくとも、大正十一年に尾山と参詣したときにも「伝後鳥羽天皇宸作宝剣」を拝していたはずである。

また、二度目の参詣の折にも「後鳥羽天皇宸翰御手印置文」を拝していることは、今中の歌集『あかね』に、

水無瀬官司の厚意により後鳥羽院の宸翰を拝しぬ、御手形の朱印生々しきものあり。

との詞書を付して、

御手形のみ文字眼離れずくりひろげかなしき極みこゝろ寒うなる

という歌がある点からもわかる。川田は、いずれの機会にも、置文を拝したのである。今中は、悲しみよりも、心が寒くなるような感慨を覚えたと詠んでいる。もっとも、「かなしき極み」といってもいるし、今中の思想や歌の傾向を考慮するとき、この歌の「こゝろ寒うなる」は、けっして批判ではない。

以上、論文ともいえないような内容で、瑣末なことを述べてきたようにも思う。私としては、大正期の大阪歌壇を明らかにしていくための一歩のつもりである。大正期の大阪歌壇の一つの核となっていたのが川田順である。川田が大阪近辺在住の歌人を集めて五日会を組織したことの意味は大きい。そして、窪田空穂・木下利玄・松村英一・尾山篤二郎などの有力歌人が川田の家に宿泊して、吟行をおこなったり、歌会に出て大阪近辺の歌人たちに刺激を与えたりしたことの意味も小さくない。なお、今中楓溪は五日会の常連のひとりであった。